

ビバハウス便り NO.60 完全不登校の“中学卒業生”にも高校進学をの夢を！

ビバハウス 運営委員長 安達 俊子

新年明けましておめでとうございます。昨年中のあらゆるご支援に心より感謝申し上げます。本年もどうぞ変わらぬご支援を、よろしくお願いいたします。

振り返ると、8年前ビバをオープンしたその年の秋はとても寒く、我慢が出来ず、ストーブをつけたのは、忘れもしない9月15日だった。雪が来たのも一番早かった。ところがどうだろう。去年は羽虫が飛んで、冬到来を告げてくれたのに、雪が来ない。なかなか来ない。暖冬を喜んでいいのか、悪いのか、複雑な気持ちにさせられ続けた12月26日、ドンと雪が来た。予定した冬休み中の第2回スタッフミーティングを1時間も遅らせなければならぬほどの大雪だった。それからは除雪、除雪に追いまくられる毎日が続いた。体中汗と雪にまみれながら、不思議な安堵感を覚えながらの年の暮れだった。

12月30日付の読売新聞朝刊を「先生たちのことが載っているよ」と、町内の知人の方がわざわざご親切に届けてくださった。特集で、「惨劇を招く心の闇」、「思春期の暴走相次ぐ」の見出しの元、1昨年稚内で起きた、息子が友人に依頼して母親を殺した事件についての私たちの見解が写真入りで紹介されていた。2006年8月におきたこの事件については、直後の9月の「ビバハウスだよりNO46」で「両親の離婚と16歳の心の空洞」という表題で、私たちの見解を発表した経過があり、それが読売記者の目に留まり、先月インタビューを受けていたものだった。事件の直前に稚内での講演の依頼を受け、地元の先生方と語り合った印象があまりにも深刻だったので、なおさらショックだったのだと思う。今でもこの少年のことを思うと胸がつぶされる思いがする。つらい人生だが負けないでほしい。

例年のように、今年もビバからは2人の少年が、北星余市高への進学を決定している。ビバハウス、そして3年前からは、厚生労働省よりの委託を受けた若者自立塾ビバの2つの取り組みで、何よりうれしいのは、私たちの元の職場でもある、北星高校への新入生を送り出せることだ。1年に入学してから、卒業するまでの成長の様子を身近で実感する時ほど幸せなことはない。今年卒業するつくば市からのT君はいち早く実力で、東京の工業系大学への進学を確定した。身体も、言葉もビバに最初に来た日からは想像もできないほど立派に（生意気になった）T君の事を見ていると、北星余市を思いもかけない体の不調で、心ならずも途中でやめざるを得なかった私にとって、今以上に幸せな仕事を選ぶことは出来なかったと思わざるを得ない。

これらの若者たちと接していて痛切に思うことは、たとえ中学校時代、さまざまな理由で、ほとんど通学できなかった、さらにことによると1日も通学できなかった若者たちにも、高校生活、特に北星余市高校の生活を味あわせてあげたいとの思いだ。実際に私の在職中にも、町内中学校3年間完全不登校、北星高校3年間皆勤賞、キリスト教系大学進学、国立大学大学院液晶工学科卒業という例もあった。今年の抱負はこれらの若者たちのために、ビバスコールとして2週間ほどのサマースクールを余市で開く夢を実現することだ。